教育週間特別講演「水無瀬駒について」

平成 21 年 11 月 21 日 (土)
講 師　熊 澤 良 尊 氏

今日は将棋の駒と、島本町、水無瀬神宮について話します。

将棋は、日本に来て 1000 年以上の歴史があります。インドのチャトランガという遊びが西の方に伝わってチェスになり、中国や朝鮮半島を経由して日本に伝わって将棋になりました。

日本に現存している将棋の資料としては、奈良の興福寺の境内から 11 世紀のものとされる将棋の駒が 10 数枚出ており、これが現在、一番古い駒とされています。

古い駒には、出土駒と、水無瀬神宮のように代々伝えられた駒とがあり、遺跡から出てくる駒は庶民がありあわせの素材で作った使い捨ての消耗品で、一方、代々大切に保存されている駒は宝。特に水無瀬駒は黄楊などを用いた超高級駒で、天皇や公家仲間、武将が繰り返し買い求めており、庶民の手には渡らなかったのです。

水無瀬駒は今から 400 年前（室町時代から安土桃山時代）から作られ、当時、公家たちは盛んに将棋を指していました。当時の水無瀬神宮の当主（神主）・水無瀬兼成の祖父・三条西実隆は、将棋好きで且つ達筆だったことから、仲間や天皇からの依頼を受け、しばしば駒の字を書いていました。このことは『実隆公記』という日記に記述があり、孫の兼成も、天皇からの命で駒の字を書くようになりました。

水無瀬神宮に保管されている『将棊馬日記』は、兼成筆の駒を届けた相手を記したもので、1590 年から 1602 年（兼成 77 歳～89 歳）の記録です。馬日記の馬とは駒のことで、日記には届け先の名前が 12 年間で 737 組分記録されています。

日記によれば、後陽成天皇や正親町上皇、公家が多く購入しており、公家が好んで注文したのは、駒が 92 枚の中将棋、武将が好んだのは駒 40 枚の小将棋でした。武将では徳川家康が 53 組も購入しており、他にも前田利家や毛利元就などの記録があります。

昨年、福井県の人が象牙の古い駒を持っているというので拝見すると、ひと目で水無瀬駒とわかりました。“玉将” のおしりに「八十五才」と書いてあり、日記を見ると、水無瀬駒は黄楊、白檀、桑製もあるが、象牙製は珍しく 5 組しか記録はありません。85 歳のときに作っている中に「象牙」とあり、届け先は道休（＝室町 15 代将軍である義昭の出家後の名）。後の 4 組のうち、家康、秀頼、秀吉の正妻・北政所の甥、もう一組は長束直吉という大名へ渡っており、やはりしかるべき地位の人に渡っています。

また名古屋の徳川美術館にも兼成筆の駒が収められており、三代将軍の娘千代姫が 3 歳で名古屋の徳川家に嫁いだ際の嫁入り道具の一つで、蒔絵の将棋盤も含めて国宝に認定されています。兼成筆の駒 737 組のうち、水無瀬神宮に保存されている 2 組も含めて、現在でも 10 組ほどが残されています。

現在の駒は、彫り駒や盛り上げ駒がポピュラーで、これらは下書きが可能で、字が上手でなくても書ける職人技として明治頃に生まれた技術です。それ以前は書き駒で、水無瀬駒はたいてい黄楊に漆で文字が書かれていますが、字が上手なので、一筆で立派な字が書かれています。

水無瀬家では兼成をはじめとして、その子・孫、三代にわたって、江戸時代の初頭まで、駒を作っています。しかしそれらの駒はごくわずかしか残っていません。その後は専門職としての駒作り職人が登場し、字の上手な公家達が駒を書く時代というのは、江戸時代の半ばで途切れてしまいました。

現在では将棋の駒というと山形県の天童市と思われていますが、もともとは大阪から取り入れられたもので、江戸時代の風土記に摂津の生産物として将棋の駒の記述があり、大きな産地だったことがわかります。大阪で作られた駒が、幕末の頃に天童に取り入れられて地場産業として発達し、現在では95%以上のシェアを持っているのです。

とはいえ水無瀬の駒は、現在の近代的に洗練された駒の基になっています。水無瀬形（みなせがた）あるいは「兼成卿写」といわれた駒は江戸時代も連綿と駒師たちに受け継がれ、現在では「水無瀬書」と呼ばれて残っています。しかし「水無瀬書」は長い間に字が変わり、古い駒の字の美しさは薄れつつあります。

『象戯圖』という、水無瀬兼成によって書写された将棋に関する説明書も残されています。兼成が天正19年に、それからさらに150年も古い書物を写し取った巻物で、序文に将棋に関する能書きがあり、駒の並べ方と進め方が書いてあります。『象戯圖』は現在、水無瀬神宮に2巻と東京の中央図書館に1巻、天童市の将棋資料館にもう1巻あり、豊臣秀次、秀頼に6〜7種類の駒を献上したときに併せて巻物も献上していると思われます。

島本町では、平成21年4月に町の歴史的文化財の第一号として認定されました。これは非常にめでたい話ですが、なぜもっと継続的に水無瀬駒に関する事業がなされなかったのか、残念です。それだけの価値のあるものなので、これを機会に、将棋の駒といえば水無瀬、水無瀬といえば将棋の駒、というのが浸透していけばと思います。